

山と博物館

第22巻 第4号

1977年 4月25日

大町山岳博物館



コブシの花咲く北アの麓

撮影 山本携挙

山麓所感

戦時中のこと、学徒動員で秩父山麓に土方作業を、その後の浪人生活で徴用逃れに谷川岳山麓の村で代用教員を、それぞれ一カ月、半年ばかりしたことがあった。しかし、今、当時の自然を思い浮べることが全然できず、思い出すのは空腹だったことばかりである。

それから三十余年たつて、同じ山麓での生活ではあるが、自然の中にすっぽりとはまり込んで、自然を楽しむことができるようになったのは年をとつたせいばかりではあるまい。

この爺ガ岳の麓に小さな家を建ててから四年になるが、同じ場所に家を建てた人の中には「寒くて」「不便で」「いやだ」という人も少なくない。「寒いのに」「同じ所へまた」どうして行くのかと聞く人もいる。でも、我が家族は皆ここが気に入っているのだ。田舎のなほ我が家では、ここを「田舎の家」とか「山の家」とか呼んでいる。そしてそれにふさわしく、子ども達の学校の春、夏、冬の休みには必ずこの田舎で生活し、帰る時には「ふとつちやつたあ」と、日焼けしたり雪焼けしたりした顔で娘はため息をつくのである。

夏は涼しくて昼寝にいいとか、冬はスキーができていいとか我が家ではよほどいる。しかし、土地の人に聞くと、それはいいがまた困るところでもあると言う。私達はここに定住しているわけではないので、何を言ってもしよせんはお客であり、外野であり、ヤジ馬であつて、この土地を理解することはできないかもしれない。しかし、ここに定住して食っていきけるならば、住みついてしまいたいと本気で考えている。

定住して働くことになれば、昼寝だパーベキューだとは言つていられなくなる。だからいつまでも「田舎」にして、そつとしておいた方がよいかもしれない。そして、いつまでもお客様でよい面ばかり見て満足していた方が気楽にちがいない。こういう都会人の考え方は、本当に自然など理解できはしないだろうし、都会と地方という問題の解決に少しも役立たないだろう……と静かな中で考えることもある。(千葉県松戸市 福本喜一郎)

鹿島のおばばを想う

故・狩野きく能さんのこと

丸山雅弘



優しいおばばの笑顔が懐かしい

鹿島のおばばのこと、いまは亡き。鹿島のおばばは、二日、脳血栓で八十六歳の生がいを終えた。山仲間にはきく能さんというより、鹿島のおばば」といった方が親しみを感じた人だ。松本から国鉄大糸線が信濃大町駅に近づくにつれて、後立山連峰のなかにひととき優雅れた容姿をほこる鹿島楳ヶ岳の双峰が目に入っ

てくる。いまは亡き。鹿島のおばばは、二日、脳血栓で八十六歳の生がいを終えた。山懐にある素朴で閑静な鹿島部落の勝山家に生まれ育って、十九歳で近くの狩野家に嫁ぎ幼なじみの夫の治喜衛さんと共に田畑の耕作と山仕事に精をだすかたわら、半世紀にわたって鹿島楳ヶ岳を訪れる岳人の世話をし続けた。この村はその昔、源氏に追われた平家の武者たちが鹿島川の源流「カクネ里」に隠れ住みその後、川を下って今の地に永住するようになった。——といひ伝えられているだけに、囲りが自然の要塞の形をしている。大町市内とはいっても町からの道のりは遠く、特に冬は積雪が深く今でこそバスが通りタクシーを呼べるが以前は暮らしても人知れぬ苦勞があったことがうかがえる。また村の耕地は全部で六ヘクタールほどで、しかも高冷地なので農作物の収穫量も少ないことから、山仕事も、自給自足の生活維持のために村の戸数は昔から十一軒のままで、人口も五十人前後だったようだ。

山男のたまり場

狩りをする人が、木こ



いろいろの囲りはいつも山菜を盛った鉢が...

登る人に対しては格別に愛想がよかつたといひ、夫の治喜衛さんも若いときから後立山連峰をこえて黒部川あたりまでも狩猟に入り、尾根といわず谷や沢の様子も知り尽くしていたので、登山が盛んになると次第に山案内や遭難救助隊の主力となって活躍するようになったこともあって、鹿島のおばばの家はいつしか偵察・荷上げ・アタックを繰り返す大学や社会人グループなど山男のたまり場となった。

漬け菜を大鉢いっぱい

ところで山仲間たちから「鹿島のおばば」とか「おふくろさん」と慕われてきた狩野きく能さんの人がらはどんなだったろうか。

岳人が入ってくると、体中に活気がみなぎり、小躍りしながら漬け物小屋に飛び入って大鉢いっぱいには野菜やアザミ、ワラビなど盛り込み、「さあさ、たんとながってくださるや」と、おばばは茶を飲みながら囲炉裏の囲りで山の話に花を咲かせていた。

山に向う若者たちが荷づくりをしていると畑から野菜をとってきて、そととリックに入れてやり、一山で死んじやいけねえよ、荷物も捨てても体だけは必ず帰ってくるんだよ」と、山行きの安全をもんべ姿で折りながら見送ったものだ。そして、冬などは大雪が降れば凍死を心配し、気温が上がれば雪崩に気がついて無事に下山するのを仏前に折りつけ、彼らが帰ってくるのを、まるで恋人を迎えるように感激し手をとって喜び合った。その姿には人のよきを通り越した優しさで人を愛する情がにじみでていた。

また、おばばは手打ちソバの名人で、ソバ粉を練る手のしわは岳人とのつき合いの年輪さえ感じさせていた。山あいに生れ育ったきく能さんは身も心も美しく、昭和四十二年八

り職人ぐらいいしか入ってこない閑静な鹿島の村に、いわゆるレジャーとして山に登る人が訪れ始めたのは大正末期から昭和初年。とりわけ日本の冬山登山の歴史はこの頃から始まり、大学や高校などは冬山の初登頂を競い合っただけで、鹿島楳ヶ岳の冬も大正十五年四月に一高の田辺和雄、塩川三勝、石原巖の三氏によって初登頂されたという。鹿島のおばばは「きく能さんと岳人との出会いもこの頃だ。

昭和三年の三月、当時京都大学の学生だった今西錦司氏が友人の水野正一郎、高橋健二、四手井綱彦の各氏らと共に狩野家を訪れ、宿泊したのがきっかけとなって民宿を開き登山者の世話をしてくれるようになった。——とおばばが生前に話してくれたのを思い出す。

また、狩野家は古く、山目付を仰せつかり苗字帯刀を許された家柄で、格式、礼儀作法にやかましかったしゅうとめだったが、山に



おばと今西錦司氏(昭和42年夏)

遠い昔のこと

今西 錦司

私をはじめ狩野家を訪れたのは、一九二八年の春だったろうか。その頃の狩野家は、老夫婦と若夫婦のふた組の夫婦きりで、他にネコが一匹いた。きくのは嫁さんとしてみては二階へあがって布を織っていた。

われわれは、狩野家を最初に訪れたのは一高旅行部の田辺(旧姓浜田)や塩川たちである。彼らは多分、爺ガ岳と鹿島槍岳に積雪期の初登山をなしたことであったろう。正確な記録が残っていないのが残念である。私が狩野家のお世話になったのは、一九三二年の夏までで、その後一九六七年の夏木崎の夏期大学に招かれた機会に、やつと三十五年ぶりで鹿島をたずね、きくのおさんにお眼にかかれてうれしかった。

(一九七七・三記)

月に今西錦司氏が木崎夏期大学に講師として来た折におばを訪ね、四十年ぶりに鹿島を訪ね、思い出の美女にお眼にかかるとかできました。ほんとうにうれしうございませと記している。さらにある岳人は「丸顔で温和な目、優しいさ……それは女優の東山千恵子さんのようだ」とも評している。おばは山行く若者を客というより我が子と思ひ、孫と感しながら握りめしをつくり、囲炉裏の火を燃やし続けてきたことを、ここに訪れる岳人はみな知っていたのだ。

遭難に泣きくずれる

お嫁さんの律子さんも「物をくれることと話し好きだった。欲が無くて現代風と言えれば経済観念が無いお人好しのおばあさん……」と、きくを懐古している。

鹿島槍ヶ岳への道は、今は扇沢から爺ガ岳経由で登る人が多くなった。しかし、雪積期の登攀はこの村を通って大谷原から天狗尾根またはダイレクト尾根、荒沢奥壁、北壁等、ルビニストが「おば、暮れ近くなると数百人のアルピニストが「おば、またきたよ元気がね……」と玄関口の入山カードに名を連ねる。鹿島山荘は民宿であり、登山補導所であり、現地連絡所であり遭難救助本部にもなる。冷厳な冬期に登山が行われるようになってから鹿島槍ヶ岳周辺で尊い命を失った人は五十人を超える。この正月も福岡まいる山岳会、晩稜山岳会、東京学芸大、グループ・ド・エギユなど、五パーティーであわせて十五人が行方不明となった。これらの人々のほとんどが狩野家の世話になり「気をつけてな」とおばが見送った人たちだ。

「遭難」の報せにおばはいつも泣きくずれてしまう。そして彼らの命日には必ず鹿島槍ヶ岳の見える近くの河原に出て、我が子のことのように冥福を祈っていたという。

さながら山の詩集

90冊の登高記念帳

狩野家の室——ともいう「登高記念帳」が

ある。登高記念帳は昭和五年十二月に第一冊目が始まって以来九十冊にもおよび、二万人あまりの岳人の名が連ねられている。生前おばはこの記念帳を見てあの日のあの時を思い出すひとときを無上の楽しみにしていた。

記念帳は、大正末期から大町登山口の名ガイトとして活躍した地元大町市六日町の桜井一雄さんが「ここにやってくる山男の思い出を残してみたら……」と提案して、この地方で「宮本紙」と呼ぶ和紙を五十枚ぐらい重ねてこよりで綴った手づくりの質素な帳面だ。

一冊目の第一頁が「昭和五年十二月十八日快晴を迎え鹿島槍ヶ岳に登頂 堀田彌一」に始まり「同二十四日爺ヶ岳に登る 斯波悌一郎」「爺ヶ岳は風雪激しきも西俣を登り扇澤を経て無事大町に出るを得たり、拾貳月二十日 逸見真雄」と記るされている。最初に記念帳に筆を入れた立教大学山岳部の堀田彌一氏は後にヒマラヤのナンダゴット遠征隊長として活躍している。

二頁目には冬山単独行で有名な、加藤文太郎氏が「昭和六年三月十一日鹿島槍へ登る」とあり、おばは氏の人柄や健脚ぶりをいつも懐かしげに話してくれたものだった。続く頁に井上鐘、田中信夫、関西学生山岳連盟京都セクション、明治大学、東京帝大田口一郎、甲南高校西村雄一、田口二郎、伊藤新一、伊藤実、慶応義塾岡崎真一、日本登高会上田徹、藤井武司、同志社児童島勘次など各氏の筆跡を見ることが出来る。



登高記念帳は90冊にもなった

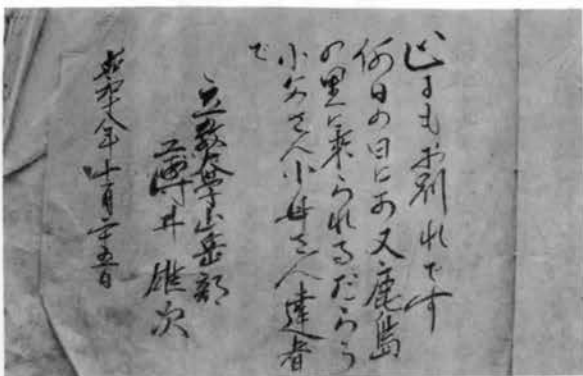


登高帳の第一頁

さらに立教大学の奥平昌英、酒井吉國、湯浅巖、中島雷次、小原勝郎、浜野正男、薄井雄次、横河正年、頼敏行、神保理一郎、佃泰誠、柴田益雄、立川達郎ら各氏が昭和七年頃から毎年のように訪れ、山岳界の著名な人々が筆をたつぷり墨を含ませて、登山の苦闘や友情を書き残し、同時におばの思いやりに感謝する岳人の気持が記るされている。

第二次世界大戦が激しくなるにつれて、その頁数もだんだん少なくなり、昭和十八年九月十二日には立教の斎藤篤氏が「又やつてきました。後二十日余りで入隊です。六年間の数々の思い出の地——自然の美とそれに結びついた人々の美しい生活がある鹿島の里を再び訪れる日は何時の日ぞ……」。同じ年の十一月二十四日薄井雄次氏は「山にもお別れです。何日の日にか又鹿島の里に來られるだろう——小父さん小母さん達者で」と書き残した。薄井氏は後戦死し、再び鹿島を訪れることはできなかった。

飯より好きな山登りも戦地に送られてしまつては手も足も出なかった。登山家の夢は打ち消され記念帳も昭和十九年十二月六日から終戦の次の年の二十一年四月二日までは空白となつていく。そして戦後再び山は活気を取り戻して四月三日に立教の柴田益雄氏が「春山満喫」と記し戦争からの開放を喜び、二十二年三月には後にビック・ホワイト・ピークの第一次遠征隊長となつた関西登高会の梶本徳次郎氏や、マナスル登頂隊長となつた横恒恒氏が地元大町の百瀬慎太郎氏の案内で鹿島



入隊を前に残した薄井氏の筆跡

を訪れるなど、日本の登山史をつくりあげた人々の名がいっぱいだ。大和元でも案内人の桜井一雄、桜井順一、和由松、勝山佐久衛、平林高吉の各氏や、山岳写真家の田淵行男氏、大町中等学校時代から薄井修助氏、小学校長の平林武夫氏、古原和美氏や舟窪小屋の福島寿子さんら大町山の会のメンバーなどの筆跡が見られる。それらの頁には、ふぶかれし天狗尾根よりかえりきて、人の心の暖かき鹿島の宿にいろりかみぬ」といった様に、この里の涼風人情を募ったサインが目立ち、さながら山の詩集をみるようだ。

悲しい頁も

昭和八年十月「南嶺と布引の鞍部に近く、小生同行者として断腸の思い一友人の悲しい筆跡だ。「亡き人の面影をしのびて新緑種く鹿島の里を訪ふ 亡き人の魂安まれとひたすらに祈りてやまむ、夜のしじまに」遭難した

婚約者を想う詩もある。

遭難は親や兄弟、友人に悲痛な思いをさせる。なかでも昭和三十年十二月二十五日に菅野院輔仁会山部の七人が「鹿島槍天狗尾根及び東尾根登攀、その後、遠見尾根の第二次合宿へ転戦する」と、若者らしく力強い筆跡を残して山に向ったが、うち四人が雪崩にまきこまれ命を失ってしまった頁はおばばの胸中をいつも痛めていた。この遭難があつて以来、おばばは無事に下山してからでなければ、この登高記念帳に筆を入れさせなかったという。

律子さんが後継ぎ「ひまこ」も誕生して往生自分の子どもがなかった。大きく能さん夫婦は昭和十七年に夫の甥の治一さんを養子に迎え二十二年に律子さんを白馬村からお嫁に迎えた。そして孫に正明君を得て、四十五年には夫を失ったが、孫の正明君の妻に松本市から矩子さんを迎えて昭和五十年にはひまこの由貴ちゃんが誕生したのだった。

治一さんもガイドや遭難防止救助隊長として活躍し孫の正明君も父の後継ぎをして立派な救助隊員となって出動している。律子さんもやはり山が好きでおばばと共に岳人の世話をしてきた。こうした家族に囲まれて「鹿島のおばば」こと、きく能さんは幸せそうに樂



ひまこの由貴ちゃんも雪の降る日が大好き、おばばの志は一家で受け継がれる

往生した。息をひきとる際、這いよるひまこの由貴ちゃんの頭を撫でながら「わしは大勢の人に大事にしてもらったからいいよ……」と言って眠るように一生を終ったという。狩野家ではおばばの米寿を記念してこの夏には鹿島槍ヶ岳周辺で尊い命を失った人々の遭難慰霊碑を建てて冥福を祈るといふ矢先だっただけにおばばの死は関係者を残念がらせているが、六月十九日には家の西の山際に慰霊碑を建立するという。きく能さんは亡くな

っても、「鹿島のおばば」の志は後を受け継いだ律子さん、そしてそのお嫁さんの矩子さん、さらに由貴ちゃんを受けつがれていくことだろう。

(大町市常盤)



救助隊で活躍する孫の正明君

お知らせ

休館日・観覧料・開館時間の変更
52年4月1日より、月曜日が休館となりま
す。ただし付属園の動物はみられます。
観覧料は個人—大人・120円、小人・40円(大人は高
団体—大人・120円、小人・40円(大人は高
校生以上・団体は20名以上)となります。
開館は午前9時より午後4時30分迄です。
人事異動 4月1日付で、横沢敏永氏が市
民課へ転出、山田民郎氏が着任した。

山と博物館 第22巻 第4号
一九七七年 四月十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇二一
印刷所 大町市下仲町 山岳博物館
大町市 大糸タイムス印刷部
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野二二、二九三)